羅生門（芥川龍之介）　＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50点］

ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、[A]羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々[ア]丹塗りの剝げた、大きな円柱に、きりぎりすが一匹止まっている。羅生門が、[イ]朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や[ウ]揉烏帽子が、もう二、三人は ありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。

なぜかというと、この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか[エ]飢饉とかいう災いが続いて起こった。そこで洛中のさびれ方は一とおりではない。[B]旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである。洛中がその［①］末であるから、羅生門の修理などは、（　a　）誰も捨てて［②］みる者がなかった。するとその荒れ果てたのをよいことにして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいには、引き取り手のない死人を、この門へ持ってきて、捨てていくという習慣さえできた。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪がって、この門の近所へは足踏みをしないことになってしまったのである。

その代わりまた鴉がどこからか、たくさん集まってきた。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾の周りを鳴きながら、飛び回っている。（　b　）門の上の空が、夕焼けで赤くなるときには、それがごまをまいたように、はっきり見えた。鴉は、もちろん、門の上にある死人の肉を、ついばみに来るのである。――もっとも今日は、刻限が遅いせいか、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草の生えた石段の上に、鴉の糞が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段のいちばん上の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬に出来た、大きなにきびを気にしながら、ぼんやり、雨の降るのを眺めていた。

作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた。」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。ふだんなら、（　c　）、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一とおりならず[オ]衰微していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな［③］波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた。」というよりも、「雨に降り込められた下人が、行き所がなくて、［④］に暮れていた。」というほうが、適当である。

（　d　）、今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人の[サンチマンタリスム]Sentimentalismeに影響した。申の刻下がりから降り出した雨は、いまだに上がる気色がない。そこで、下人は、何をおいてもさしあたり明日の暮らしをどうにかしようとして――いわばどうにもならないことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大路に降る雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

[C]雨は、羅生門を包んで、遠くから、ざあっという音を集めてくる。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めに突き出した甍の先に、重たく薄暗い雲を支えている。

問一　二重傍線部**ア**～**オ**の漢字の読みを平仮名で答えなさい。

問二　空欄部①～④に当てはまる語を、漢字一字または二字でそれぞれ答えなさい。

問三　空欄部ａ～ｄに当てはまる語を、次の**ア**～**カ**の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　殊に　　**イ**　もちろん　　**ウ**　もとより　　**エ**　もっとも
オ　そのうえ　　**カ**　すると

問四　波線部**A**「羅生門」は、もともと都の「外郭（＝外側の城壁）の門」を意味するものとして「羅城門」と書かれた。作者が「羅生門」という表記を選んだのは、なぜだと考えられるか。五十字以内で答えなさい。

問五　波線部**B**「旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである。」とあるが、洛中のさびれ方に関して、作者が「旧記」のこの部分を引用したのは、なぜだと考えられるか。六十字以内で二点答えなさい。また、「旧記」の作品名と作者名を答えなさい。

問六　波線部**C**「雨は、羅生門を包んで、遠くから、ざあっという音を集めてくる。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めに突き出した甍の先に、重たく薄暗い雲を支えている。」とあるが、これは単なる情景描写にとどまらない心情的描写であると考えられる。この描写の効果について四十字以内で説明しなさい。また、ここで使用されている修辞法を漢字三字で答えなさい。

問六			問五				問四			問三	問二	問一
修辞法			作品名							a	①	ア
										b		
										c	②	イ
			作者名							d		
											③	ウ
											④	エ
												オ

学年
組
番号
氏名
得点

羅生門（芥川龍之介）　＊

〔出題の意図と留意点〕　問一、漢字の読み。問二、語句と漢字。問三、文脈から接続詞、副詞を選ぶ。問四、主題にかかわる理解。問五、舞台背景、状況を読み取る。問六、情景描写の表現効果。

☆解答例と配点

問一　ア　にぬ　イ　すざく　ウ　もみえぼし　エ　ききん　オ　すいび　〈2点×5〉

問二　①　始　②　顧　③　余　④　途方　〈2点×4〉

問三　a　ウ　b　ア　c　イ　d　オ　〈2点×4〉

問四　「生」の字を用いることで、人間の生き方の問題にかかわる作品の舞台であることを含意させるため。（四十六字）〈6点〉

問五　真実性を持たせると同時に、都の衰微が、仏への信仰心まで失わせるほどに、人心を荒廃させていることを読者に印象づけるため。（五十九字）〈6点〉

作品名＝「方丈記」〈2点〉　作者名＝鴨長明　〈2点〉

問六　どうしようもない状況に追いつめられた下人の重苦しく不安な心理状態を暗示する効果。（四十字）〈6点〉

修辞法＝擬人法　〈2点〉

計50点

羅生門（芥川龍之介）　＊＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50点］

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広いはしごの中段に、一人の男が、猫のように身を縮めて、息を殺しながら、上の様子をうかがっていた。楼の上から差す火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短いひげの中に、赤くうみを持ったにきびのある頬である。下人は、初めから、この上にいる者は、死人ばかりだと［①］をくくっていた。それが、はしごを二、三段上ってみると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと、動かしているらしい。これは、その濁った、黄色い光が、隅々にくもの巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったのので、すぐにA それと知れたのである。（　a　）、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、やもりのように足音を盗んで、やっと急なはしごを、いちばん上の段まではうようにして上り詰めた。そうして体をできるだけ、平らにしながら、首をできるだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内をのぞいてみた。

見ると、楼の内には、うわさに聞いたとおり、幾つかの死骸が、ｱムゾウサに捨ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つとも分からない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるということである。もちろん、中には女も男も交じっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だという事実さえ疑われるほど、土をこねて造った人形のように、口を開いたり手を伸ばしたりして、ごろごろ床の上に転がっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光を受けて、低くなっている部分の影をいっそう暗くしながら、永久におしのごとく黙っていた。

下人は、それらの死骸の腐乱した臭気に思わず、鼻を覆うことも忘れていた。B ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからである。

下人の目は、そのとき、初めて、その死骸の中にうずくまっている人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木切れを持って、その死骸の一つの顔をのぞき込むように眺めていた。髪の毛の長いところを見ると、たぶん女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、ｲザンジは息をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると、老婆は、松の木切れを、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、ちょうど、猿の親が猿の子のしらみを取るように、その長い髪の毛を一本ずつ抜き始めた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えていった。そうして、それと同時に、この老婆に対する激しい憎悪が、少しずつ動いてきた。――いや、この老婆に対するといっては、ｳゴヘイがあるかもしれない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分ごとに強さを増してきたのである。このとき、誰かがこの下人に、さっき門の下でこの男が考えていた、飢え死にをするか盗人になるかという問題を、あらためて持ち出したら、恐らく下人は、何のｴミレンもなく、飢え死にを選んだことであろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木切れのように、勢いよく燃え上がり出していたのである。

下人には、もちろん、なぜ老婆が死人の髪の毛を抜くか分からなかった。したがって、C 合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということが、D それだけですでに許すべからざる悪であった。もちろん、下人は、さっきまで自分が、盗人になる気でいたことなぞは、とうに忘れているのである。

問一　二重傍線部**ア**～**エ**の片仮名を漢字に改めなさい。

問二　空欄部①に当てはまる語を、漢字一字で答えなさい。

問三　空欄部ａに当てはまる語を、本文中から十五字で抜き出しなさい。

問四　波線部**A**「それ」とは、どのようなことを指しているか。本文中の言葉を使って三十五字以内で説明しなさい。

問五　波線部**B**「ある強い感情」とは、具体的にはどのようなことか。本文中から抜き出しなさい。

問六　波線部**C**「合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。」とは、どのようなことか。

問七　波線部**D**「それだけですでに許すべからざる悪であった。」とあるが、「それだけで」というのは、この男の悪を憎む心が、ここではどのような性質であることを述べたものか。「それだけで」が受けている部分を踏まえて五十字以内で答えなさい。

学年	組	番号	氏名	得点

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七
ア						
イ						
ウ						
エ						

羅生門（芥川龍之介）　＊＊

〔出題の意図と留意点〕　問一、問二、漢字と語句。問三、状況認識の焦点をつかむ。問四、指示内容の確認。問五、前後の照応の把握。問六、表現内容の理解と説明。問七、状況と心理の関連性をつかむ。

☆解答例と配点

問一　ア　無造作　　イ　暫時　　ウ　語弊　　エ　未練　〈2点×4〉

問二　高　〈2点〉

問三　この雨の夜に、この羅生門の上で　〈8点〉

問四　誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと、動かしているらしいこと。（三十四字）〈8点〉

問五　六分の恐怖と四分の好奇心　〈8点〉

問六　老婆の髪の毛を抜く行為が不可解なるがゆえに、論理的に善悪を判断できなかったということ。〈8点〉

問七　雨の夜に羅生門の上で死人の髪の毛を抜くことが感覚的に許せないという感情的なものにすぎない性質。（四十七字）〈8点〉

計50点

羅生門（芥川龍之介）　＊＊＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50点］

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつらにしようと思うたのじゃ。」

下人は、老婆の答えが①存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷ややかなアブベツといっしょに、心の中へ入ってきた。すると、そのイケシキが、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、蟇のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんなことを言った。

「なるほどな、死人の髪の毛を抜くということは、なんぼう悪いことかもしれぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいなことを、されてもいい人間ばかりだぞよ。現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干したのを、干し魚だと言うて、ウ太刀帯の陣へ売りに往んだわ。②疫病にかかって死ななんだら、今でも売りに往んでいたことであろ。それもよ、この女の売る干し魚は、味がよいというて、太刀帯どもが、欠かさず菜料に買っていたそうな。わしは、この女のしたことが悪いとは思うていぬ。せねば、飢え死にをするのじゃて、しかたがなくしたことであろ。されば、今また、わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、飢え死にをするじゃて、しかたがなくすることじゃわいの。じゃて、そのしかたがないことを、よく知っていたこの女は、おおかたわしのすることも大目に見てくれるであろ。」

Aこの老婆は、大体こんな意味のことを言った。

下人は、太刀を鞘に収めて、その太刀の柄を左の手で押さえながら、エレイゼンとして、この話を聞いていた。もちろん、右の手では、赤く頬にうみを持った大きなにきびを気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、Bある勇気が生まれてきた。それは、さっき門の下で、この男には欠けていた勇気である。そうして、またさっきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえたときの勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である。下人は、飢え死にをするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。そのときのこの男の心持ちから言えば、飢え死になどということは、ほとんど、考えることさえできないほど、意識の外に追い出されていた。

「きっと、そうか。」

老婆の話が終わると、C下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、老婆の襟髪をつかみながら、かみつくようにこう言った。

「では、俺が引剝ぎをしようと恨むまいな。俺もそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剝ぎ取った。それから、D足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。はしごの口までは、僅かに五歩を数えるばかりである。下人は、剝ぎ取ったオ檜皮色の着物を脇に抱えて、瞬く間に急なはしごを夜の底へ駆け下りた。

問一　二重傍線部**ア**～**オ**の片仮名は漢字に改め、漢字はその読みを平仮名で答えなさい。

問二　傍線部①「存外」、②「疫病」の意味をそれぞれ答えなさい。

問三　波線部A「老婆は、大体こんな意味のことを言った。」とあるが、老婆の弁明の要点を、二点に絞ってそれぞれ二十字以内でまとめなさい。

問四　波線部B「ある勇気」とは、どのような勇気か。「という勇気。」に続く形で、本文中から五字で抜き出しなさい。

問五　波線部C「下人は嘲るような声で念を押した。」とあるが、なぜか。五十字以内で答えなさい。

問六　波線部D「足にしがみつこうとする」には、老婆の必死で執拗な気持ちが表されている。同じように老婆の切実さが表されている動作を、本文中から三十字以内で抜き出しなさい。

問七　1　下人の将来を暗示する象徴的な表現を、本文中から五字以内で抜き出しなさい。

2　それは、どのような暗示的効果を持つか。

問八　この小説の作者について、次の問いに答えなさい。

1　作者名を答えなさい。

2　この作者と関連の深い事柄とその作品を、次の**ア**～**キ**の中から三つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

A「事項」　**ア**　耽美主義　**イ**　新現実主義　**ウ**　人道主義　**エ**　芸術至上主義　**オ**　新思潮
カ　白樺　**キ**　文学界

B「作品」　**ア**　「鼻」　**イ**　「門」　**ウ**　「友情」　**エ**　「地獄変」　**オ**　「雪国」
カ　「機械」　**キ**　「芋粥」

学年	組	番号	氏名	得点

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八
ア	①	・	という勇気。			1	1
イ	②	・				2	2 A
ウ							2 B
エ							
オ							

羅生門（芥川龍之介）　＊＊＊

〔出題の意図と留意点〕　問一、問二、漢字の読みと書き取り、語句の意味。問三、要点を絞って内容をまとめる。問四、前後の照応からの内容理解。問五、言動から心理の動きをつかむ。問六、動作、態度から心情を探る。問七、暗示的な表現の効果と人物の将来像。問八、文学史的理解。

☆解答例と配点

問一　ア　侮□　イ　気色　ウ　たてわき　エ　冷然　オ　ひわだいろ　〈2点×5〉

問二　①　思いがけなく　②　はやりやまい　〈2点×2〉

問三　・悪に対して悪を行っても許される。（十六字）
・生存のためにしかたなく行う悪は悪でない。（二十字）〈3点×2〉

問四　盗人になる（という勇気。）〈4点〉

問五　①老婆の自己弁明の論理が引剝ぎを実行するための格好の口実となり、②また、その被害者が老婆本人であるから。（五十字）〈8点〉

問六　片手に、まだ死骸の頭から取った長い抜け毛を持ったなり（二十六字）〈6点〉

問七　1　夜の底（三字）〈2点〉
2　悪の暗黒世界に沈んでいく印象を与える効果。〈4点〉

問八　1　芥川龍(竜)之介　〈2点〉
2　A　イ・エ・オ（完答）〈2点〉　B　ア・エ・キ（完答）〈2点〉

計50点